

『“ちょっと気になる子”への理解とかかわり —小学校に入る前に—』



東京女子医科大学八千代医療センター
臨床心理室 秋山 三佐子



3~5才ってどんな時期？

子どもは赤ちゃん時代のお母さんとの出会いから始まり、人とかかわりを通して社会的にさまざまなことを学んでいきます。3才頃になると大人との関係だけでなく、保育園や幼稚園の同年代の子どもたちとの交流の中で急激に経験の世界を広げていきます。5才頃になるとそれまでに身につけた能力や技術、友だち関係のスキルを今度はどう生かしていくか体験に基づいて見出す力もついてきます。そしてそれらの力を携えてその先にある学校生活に足を踏み入れていきます。

集団の仲間入りをするということ

保育園や幼稚園は新鮮な刺激に満ち、みんなで“一緒にやる”喜びを体感できる場でもありますが、中には新しい環境を怖いと感じる子ども、集団の枠にはめられることを窮屈に感じる子ども、あるいは枠組の存在自体に気づかない子どももいます。

集団の世界に足を踏み入れるとそれまでと勝手が違ってきます。家族には暗黙の了解でわかってもらえていたことが、子ども同士ではきちんとことばにしないと伝わらず苛立ちを感じます。先生がみんなに向かって出す指示に注意を向けにくかったり、好奇心をそそられる新しい刺激に目移りして遊びが定まらない子もいます。ずっとブロックで遊んでいたのに次の活動へ促されると自分のペースを乱されたと感じ腹を立てたり、逆に指示にまったく反応しない子もいます。これらは困る、気になる行動として大人の目にうつりますが、子どもによって意味や背景がことなり、どう理解してあげるのがよいかかわってきます。

困った行動の意味するもの

走り回ったりはしゃいだり泣いたり、くるくると表情を変えながら多彩な姿を見せてくれるのが子どもたちの魅力です。でも、前述のような様子が許容範囲を超えていたり、はからずも自他を傷つけてしまうなど、危険を伴ったり日常生活に支障をきたす場合はやはり対応に工夫が必要になってきます。子どもによっては叱られるようなことをしてでも注目を得ようとする場合もあります。わざとふざけたりあまのじゃくな行動が多い子どもは、そんな形で注目を得る様子を身につけてしまっているのかもしれない。

けんかや反抗、自己中心性も心の発達の必然的なあらわれですが、程度と質によって、成長の通過点として理解できる範囲なのか、子どもからの何らかのサインとして受け止めるべきか考える必要があります。



東京女子医科大学
八千代医療センター
TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY YACHIYO MEDICAL CENTER

